堀合先生に学ぶ(12)

保育の特色

立川　多恵子

保育観察を通して堀合文子先生から学んだ私たち（立川、上垣内）の保育報告は今月で終わる。

その間、幼児教育の原点である「子どもの主体性を育てる保育」、「一人ひとりの育ちを大切にする保育」について、いろいろ考える機会を得ることが出来たことは感謝に耐えない。今後も許されるなら観察を継続させていただくつもりだが、最終回を迎えるに当たって、二年間に亘る観察を通して私なりにとらえた「堀合先生の保育の特色」について記しておきたい。

一、一人ひとりと出会う

とかく私たちは入園してくる子どもを迎える場合、「今年の三歳児は……」といったとらえ方をするが、入園する子どもたちは、どの子も三歳であったとしても、一人ひとり別人格であり、十人いれば

十通りの育ち方をしている子どもたちであり、保育者は一人ひとりに即した迎え方をする必要がある。堀合先生は子どもたちとの出会いにおいて、その点を十分配慮して保育している。

新しい子どもを迎える前の心境を私に語ってくれた言葉の中に次のようなものがある。「私は何時でも、今年はどんなお子さんが入園してくるかドキドキします。特にこちら（十文字幼稚園）に移ってからは、ユニークなお子さんが多くて、一人ひとりの子どもをどう迎え入れたらよいか考えると、新しい子どもと出会えるのが嬉しいような怖いような気がするのです」と話されていた。

入園は保育者と子どもの出会いの場でもある。今なお入園時に一人ひとりの子どもへの期待と恐れの感情を持ち続けている堀合先生の保育姿勢に頭が下がる。現代社会に生きる子どもたちの内面は結構複雑なもので、先生は一人ひとりの子どもと心をつなげることを大切にしたいと強調している。

出会いといえば、大切なのは入園式の出会いだけではない。先生は毎朝の子どもとの出会いも大切にしている。今まで家庭で保護者と一緒に生活していた子どもが、入園によって突然引き離され、自立の生活を要求される子どもの心理状態を考えると、もっと子どもとの朝の出会いを大切にする必要があると考える。

先日地方で堀合先生の保育について話す機会があったが、話を聞いてくれた保育者の一人が「私は大分前に堀合先生の保育を見せて頂いた者ですが、先生はいまだに一人ひとりの子どもを靴箱の前で迎えて保育室に伴っていらっしゃるのですか」と質問をした。「その通りです」と応えたところ「非常に丁寧なんですね」と言った。堀合先生の保育はそうした点、頑固なぐらい徹底している。

勿論子どもは、園生活に馴れてくると、先生が迎

えに出て、廊下の途中で走り出す子、友達のやっている遊びが面白くて、かばんをかけたまま遊び出す子等いろいろである。先生は保育者との朝の出会いが、子どもが園生活の中でその日安定して遊べるかどうかを左右すると考える。

二、子どもとの信頼関係の確立

保育の基本は、保育者が一人ひとりの子どもと信頼関係をいかに結ぶかにある。

したがって入園当初は、どんな小さな傷でも、訴えてくる子どもに対して、優しく受け止めて、冷やしてやったり、薬をつけたり、カット絆を貼ってやったりして、丁寧にかかわる。また足を洗う時など、子どもとスキンシップが出来る機会として非常に大切にしている。前にも一度書いたことがあるが、一人の子が他の先生に泥だらけになった足を拭いて貰っていたら、反対側にいた堀合先生が走ってきて、その先生からタオルを奪うようにして、拭いてやった場面があった。このことについて堀合先生は「拭いて下さる先生には申しわけなかったのですが、子どもと信頼関係が出来るまでは、他の先生にお世話をお願いすることを極力さけたいと思っています」と言われた。

クラスに十八人の子どもがいると、信頼関係の結び方にも十八通りのプロセスがある。入園当初うるさいほど「せんせい、せんせい」と言って甘えていた子どもが、一週間も経たないうちに友達と遊び出すこともある。初めのうち先生にはあまり興味を示さない子が五月のゴールデンウィークを過ぎた頃から急に先生を慕って泣き出す子もいる。また一学期は結構遊べているように見えたのに、他の子が落ちついて遊び出す二学期になって先生の後追いをする子がいたりする。こうしたさまざまな様相を示す子

どもたちに寄り添って信頼関係を確立するには、一人ひとり異なった過程がある。

堀合先生はその一人ひとりの子の行動の奥にある気持ちを察して、子どものその時の状況に即して丁寧に対応する。先生でさえ、子どもの気持ちを察しきれないこともあり、そんな時は「失敗でした」と笑いながら話される。それが私たちにとってはよい学びの場になる。先生の子どもへの関わり方は画一的でない。瞬間の子どもの心を読み取って、臨機応変に対応をする。こうした多面的なかかわり方が先生と子どもの信頼関係を一歩一歩築いて行く。信頼関係の確立こそ、子どもにとってのホームベース作りの基礎であり、彼らが安心して自分なりの遊びに集中できる土台作りの過程でもある。

先生は一人ひとりの子どもと信頼関係を結んで、早くホームベースになってやりたいと考え、子どもたちの世話を積極的にする。それが見ていると過保護に見えることがあるが、そうした先生のお世話が子どものアイデンティティーの保障につながっていると言うことも出来る。

子どもにとって「先生は頼りになる存在である。困ったことがあれば、先生に頼ろう」といった気持ちが園生活における子どもの心の安定を保障するばかりでなく、その子の創造性や自発性を育てる。

三、子どもが生み出す遊びを大切にする

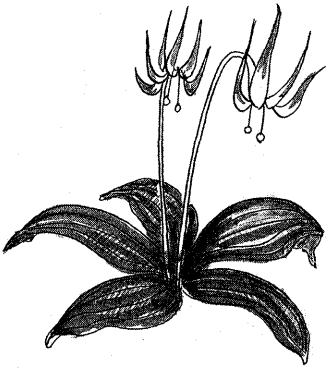
堀合先生のクラスの子どもが生み出す遊びはユニークである。それらの遊びを見ていると、「〇〇あそび」と名前のつけようもない遊びが多い。しかし子どもたちが自分たちで生み出した遊びに取り組んでいる姿は真剣そのものである。単に他の子の遊びに付き合っているのではなく、その遊びの面白さに没頭しているのである。

勿論時には他の子のやりはじめた遊びに参加して

楽しむこともあるが、その遊びにヒントを得て、そこから自分なりの遊びを生み出す。先生が子どもの生み出す遊びを大切にしているのは、まさしくそこに子どもの主体的に生きる姿が存在すると考えるからである。

「以前の子どもは入園当初、先生が先に立って遊んでやることで、次第に自分たちで遊び出すようになったのですが、最近の子どもはそんなことをすると、何時までも『せんせい、遊んで、何して遊ぶの』ということになってしまうので、子どもの世話をしながら、子どもが自分で遊び出すのを待つのです」と語る。子どもが何かやり始めたら、それを援助していくのが保育者の役割と考える。

ある時私がなかなか遊び出さない子どもを砂場に誘ったことがあった。砂遊びに興味を持たせてやりたくて、砂山を作ってやろうと、スコップで砂を掘りはじめた時、堀合先生から「やめてください」と言われ、私はハッとした。先生が何時も口癖のように学生たちに「子どもと一緒に遊ぶのはよいが、子どもを遊んでやるのはやめて欲しい」と言っていた言葉を思い出した。遊んでやると、子どもが自分で



遊びを生み出すことをしなくなるという。「もし子どもと遊んでくださるなら、貴女も自分のために砂山作って楽しんでください。そうすると、子どもが刺激されて、自分なりの遊びをやり出します」

たしかに遊びは自発的なものである。人にやらせられてやるのではない。それでは子どもも楽しくない。例えたわいない遊びに見えても、自分で生み出した遊びに没頭することによってその子なりの満足感が得られ、自分も結構やれるのだという自信と、またやろうという意欲が湧出する。

四、子どもの要求を受け止める

男の子の一人が「せんせい、ジェットマンかいて」と言って、紙を持って先生のところに来たことがある。その時先生は「困ったわね、どう描いたらいいかしら…」と頭を傾げていたが、「ごめんなさい。先生明日までにお勉強して来るから」と率直に謝った。

先生はその日、本屋に立ち寄って、ジェットマンの載っている絵本を買い求め、夜なべして描く練習をしたという。

翌日、再び「せんせい、ジェットマンかいて」とやってきたので、先生は早速絵本を見ながら描いてやった。それから二年経ったが、今では子どもが「せんせい、〇〇かいて」と要求するキャラクターの絵を次々にこなす。

こうした先生の熱心さが、先生のクラスにキャラクターのお面を普及させた。私は余り文化的ではないキャラクターの絵を、練習してまで描いてやる先生に疑問を感じたこともあったが、先生が子どもの要求に誠心誠意応えることによって、「まず信頼関係を育てる」といった先生の基本姿勢を大切にしたいと考える。

子どもたちは、〇〇レンジャーやセーラームーン

のお面に凝った後、それらを卒業して同じテーブルで、その子なりのお面やかばんを作り出していく。

五、その子らしさを尊重する

堀合先生のクラスの子はなかなか個性的である。年少組の時には長期間ロッカーの中にもぐり込んで先生や他の子の動きをじっと見ていた子もいた。先生はその子について「楽しみな子どもです」と言って目を細めた。年中組になった彼女は、最近は作ることに精を出し、ユニークなデザインのかばんを生み出し、そのかばんを抱えてホールに行って、友達とお母さんごっこに興じている。

先月号で取り上げた男の子も入園当初は緊張のあまり暴れたり、奇妙な声を表出していたが、年中組になって先生を積極的に頼るようになると、安定して遊びはじめ、彼なりに生み出す遊びの中で、仲間とごっこ遊びを楽しむようになった。入園当初むしろ、手がかかると思っていた子どもの方が面白い遊びをするように思われる。

先生に十分手をかけて貰うことによって、子どもは安定し、中身もふくらみ、その結果その子の持つ力をゆり動かして自主的活動を通して子どもは育つ。

したがって決してあせらず、その時のその子どもの気持ちを十分汲み取ることに日々心掛ける。ただどこまで待つかは、保育者の感性によるところが大きいが、子どもの状態を見て、時には積極的に行動を起こす必要もある。

六、子どもも先生も園生活を楽しむ

倉橋惣三は『育ての心』の中で、保育者自身が幼稚園の生活を楽しむことが大切であり、それが子どもの楽しい園生活を保障することになると述べているが、堀合先生はそれを実践している保育者の一

人である。堀合先生の保育は一見、子どもの要求を受け入れて、ひたすら子どものために尽くしているように見えるが、傍で先生の仕事ぶりをじっくり見ていると、結構先生自身も保育という仕事の中で充実している。

子どもを帰してから、何度となく先生と話す機会を得たが、先生は何時も今日の保育の中で子どもから学んだこと、それに対する自分の思いなどを感動を交えて話される。

先生は長い保育者生活において、信念を持って仕事に携わってきたが、未だに子どもによって新しいことを発見し、それによってゆさぶられ、蘇っている。

そのため五十余年もの長きにわたって、子どもとの生活が継続しているのだと思う。

例え保育者が生き生きしていても、子どもの人間性を無視した保育者優位の保育からは、先生が充実していれば子どもも楽しいといった公式は成り立たない。何故なら、保育者の生き甲斐が、子どもの生き甲斐を保障することにならないからである。

私は堀合先生のクラスに入れて頂き、先生の保育をビデオカメラで取らせて貰っているが、ブラウン管に映し出される先生の姿は若い。子どもと喜びを共にしているからにちがいない。

（十文字学園女子短期大学）